

フリウリ語の定動詞の否定形

— 特に接語形主語人称代名詞との関連において —

Il negativo friulano *no* in combinazione coi pronomi clittici

山本真司

Shinji Yamamoto

0. はじめに 本稿では、フリウリ語の否定表現が、ある特定の現象の解明に傍証としてどのように利用されたかを概説しようとするものである。したがって、否定表現そのものを中心テーマとする研究とは言えないかもしれないが、本稿の出発点はやはり否定表現に対する関心であり、締めくくりでもやはり否定表現に関して幾らかの提言ができればと思っている。

1. フリウリ語の否定辞 *no* による定動詞の否定 北イタリアは、1つの言語的なまとまりをなしていると同時に、多様な方言差を示す地域である。定動詞の否定表現も、否定辞を動詞の前に置くもの（ヴェネトの多くの方言における *no*）、あるいは動詞に対して後置するもの（例えばミラノ方言の *minga*、ピエモンテ方言の *nen*）、さらに動詞を義務的に2つの否定辞で挟むもの（例えばラディン語バディア方言の *ne ... nia*）など、さまざまである。

フリウリ語の場合、典型的な否定の形式は、否定される定動詞（実は定動詞に限らず、不定法でも、あるいはその他の品詞でも）の前に否定辞 *no* を添える¹⁾ というものであるが、これは一見、特別な考察を必要とするほど複雑な構造ではないように思われそうである。

そのため、ここで取り上げるような現象との関連がなければ、定動詞の否定も、特に注目されることもなかったかも知れない。その現象とは、接語形主語人称代名詞の存在である。

2. フリウリ語の主語人称代名詞 フリウリ語の人称代名詞の特徴の1つは、文の主語になる形にも、強形と弱形²⁾の区別が、すべての人称・数にわたって存在することである。その形は次の通り³⁾：1. *jo/o* 2. *tù /tu* 3. *lui/al* (男性) *jê/e* (女性) 4. *nô, noaltris/o* 5. *vô, voaltris/o*, 6. *lôr/a*。以下、これらの代名詞を、動詞 *cjantâ*「歌う」の(能動態)現在諸形(1. *cjanti* 2. *cjantis* 3. *cjante* 4. *cjantin* 5. *cjantais* 6. *cjântin*)と組み合わせて観察していく。

人称代名詞の体系は、フリウリ語の研究当初から、さまざまな研究者により記述の対象とされてきたが、現在の共通語(コイネー)で使われている形の元となったのは Marchetti 1952 の記述であると言ってよく、本稿でも基本的にそれに従うものとする。人称代名詞の振る舞いに関して重要なのは、次のような点である。

(1) いわゆる「主語ゼロ」の言語とは異なり、動詞は、主語なしに単独で用いることはできない。⁴⁾

*Cjanti. / *Cjantis. / *Cjante. / *Cjantin. / *Cjantais. / *Cjàntin.⁵⁾

(2) 強形の主語人称代名詞および名詞・名詞句など、強形の主語は、単独で定動詞の主語となることはなく、必ず同じ人称の弱形の主語人称代名詞と共に使われなければならない。

*jo cjanti / *tù cjantis / *lui cjante, *jê cjante / *nô cjantin / *voaltris cjantais / *lôr cjantin
~ jo o cjanti / tù tu cjantis / lui al cjante, jê e cjante / nô o cjantin / voaltris o cjantais / lôr
a cjàntin

(3) これに対して、弱形の主語人称代名詞は、対応する強形の主語を伴うことなく用いられ得る。

o cjanti / tu cjantis / al cjante, e cjante / o cjantin / o cjantais / a cjàntin.

(4) 弱形の主語人称代名詞は、常に動詞に前置されなければならない⁶⁾が、強形の主語は、独立の名詞句として振る舞い、意味上の必要に応じて文中のさまざまな位置に来ることができる。

jo o cjanti / o cjanti jo / jo...o cjanti / o cjanti...jo etc.

(4) は、弱形の主語人称代名詞は接語 *clítico* であるということを示している。また、(1) から (3) は、言い換えれば、弱形の主語人称代名詞は常に使われる、つまり、その使用が**義務的**であるということである。それに対して強形の主語人称代名詞は、(3) (4) から、(文を成立させる必要条件ではないという意味で) **任意的**であると言えよう。また、(2) の現象は、強形の主語は弱形の主語人称代名詞と一緒に現れるという意味で、主語人称代名詞の**重複使用**とも呼ばれる。

フリウリ語の弱形の主語人称代名詞は、様々な名称で呼ばれるが、以後、本稿では、文法理論研究で定着しつつある「接語形主語人称代名詞」 *pronomo soggetto clítico* という呼び方を使うことにする。

接語形主語人称代名詞自体はさまざまな言語に存在し、別に珍しいものではない。フリウリ語の特徴として研究者の注意を特に引いたのは、その**義務的使用**および**重複使用**が、すべての人称で行われるという点であった。

3. 北イタリア諸方言やその他のロマンス語との類似 このような義務的使用および重複使用の接語形主語人称代名詞の存在は、イタリア語とは顕著に異なる⁷⁾点でもあり、比較的古くから研究者の注目するところとなってきた。しかし、同時に、フリウリ語に限らず北イタリアのロマンス系諸語 — いわゆる北イタリア系諸方言⁸⁾ — に広く見られる現象でもあることが認識され、それを類型論的に考察し、多様性の下に潜む進化の共通な方向を探り出そうとする研究がなされるようになった。その研究は、北イタリアの外のロマンス語 — フランス語、オック語など — にまで拡大されていった。

このような研究は、特に変形生成文法の立場から押し進められ、調査された各言語の振る舞いを説明するためのパラメータの特定や、さらには文法理論研究一般への寄与を目指して、さまざまな試みが行われた。本稿ではその1つ1つについて詳細に論じることはできないが、それらの試みが、新た

な言語調査を推進し、今まで知られていなかった言語やその諸現象、または従来あまり注目されてこなかった事実に注意を喚起することに貢献したことは評価しなければならない。

これらの研究の成果と密接に関連した形で、フリウリ語についても、考察が深められていった。接語形主語人称代名詞に関して、研究の初期には、北イタリア系諸方言やフランス語の類似した現象との、比較的単純な対比によって片付けられていたのが、より注意深い観察がなされるようになると、一見すると似ている諸現象の間にも、細部には重要な相違があることがわかってきた。

例えば、主語人称代名詞の重複用法は、フランス語 *moi je viens* と比較できるのではないかという提案がなされたことがある (Marchetti 1952)⁹⁾。つまり、重複用法は一種の左方転位構文で、強形の主語は、左方転位構文によって文の左へ移動された要素ということになる。しかし、後には、フリウリ語における代名詞の重複用法が左方転位構文に限らない証拠として、主語が *nissun*「誰も … ない」のような数量詞 *quantificatore* であるような文 — これを左方転位構文とみなすことは困難である — でも接語形主語人称代名詞は規則的に使われる (*nissun al ven.* または *nissun nol ven.*「誰もこない」) ことが指摘されたのである (Rizzi 1984, cit. in Beninca' 1986)。

フリウリ語の主語人称代名詞の体系の特徴は、このほか、さまざまな観点から研究されていったが、その際に、傍証・試金石として役立つ現象の1つが、否定表現であった。

4. 接語形主語人称代名詞と否定辞の *no* ここでは、Marchetti 1952, Beninca' / Vanelli 1984, Beninca' 1986 などに拠って、否定辞 *no* が定動詞に添えられると、接語形主語人称代名詞にどのような影響が及ぶかを見てみたい。

まず、*tu cjantis, al cjante* を否定の形にすると、*no tu cjantis, nol cjante* (*no + al > nol* は、衝突による母音削除) となる。つまり、*no* は、主語の前に置かれるのである。この位置付けは、北イタリアの幾つかの方言 (例えばヴェネト方言) に同じものが見られるが、フランス語などのような、主語が弱形・強形を問わず否定辞の前に来る (*il ne chante pas. ~ Charles ne chante pas.*) 言語とは明らかに異なっている。

これよりも注意深く調べる必要があるのは、他の人称の場合である。*o cjanti, e cjante, o cjantin, o cjantais, a cjàntin* を否定の *no* と組み合わせると、*no cjanti, no cjante, no cjantin, no cjantais, no cjàntin* となる。すなわち、接語形主語人称代名詞は消えてしまうのである。

ここに、もし *no + o > no* のような変化を想定できるものなら、*o* が落ちるのは単なる母音削除であるかも知れない。しかし、次の例からわかるように、*no* との組み合わせのみならず、さまざまな弱形の人称代名詞 (与格や対格) との組み合わせでも同じように *o* は落ちるのである¹⁰⁾ : *lu cjanti* (*lu* は3人称単数男性対格), *la cjanti* (*le* は3人称単数女性対格), *i cjanti* (*i* は3人称単数男女共通与格), *ju cjanti* (*ju* は3人称複数男性対格), *lis cjanti* (*lis* は3人称複数女性対格), *ur cjanti* (*ur* は3人称複数男女共通与格)。他の人称形との組み合わせも同様に *lu cjante etc., lu cjantin etc., lu cjantais etc., lu cjàntin etc.,*

となる¹¹⁾。lis や ur など末尾が子音に終わっている形も関係していることを見れば、母音削除とは異なった現象であると考えられるであろう。

つまり、これらの接語代名詞は、他の代名詞や否定辞の no が来るとそれに場を譲り渡して消えるのである。あるいは、動詞の前に他の要素が無い場合、その空白を埋めるようにして現れるのだと言ってもよいであろう。

なお、tu の場合には、他の接語形人称代名詞が来ても、脱落することはない(語順は「tu+ その他の代名詞+ 動詞」となる): tu lu cjantis, tu le cjantis, tu ju cjantis, tu lis cjantis, tu j cjantis, tu ur cjantis。また、al は、no が立つときには脱落しなかったが、他の接語形人称代名詞が動詞の前に立つ場合には落ちる。したがって、例えば al cjante と e cjante に lu をつけると、どちらも lu cjante となる。

いずれにせよ、フリウリ語の場合、接語形人称代名詞によって表される主語は、単に動詞の前に主語が置いてあるというより、もっと密接な関係を動詞と持っているようだ。もし、否定表現を「no+ 動詞」と分析して否定辞の no より右側の部分を動詞であると考えれば、接語形主語人称代名詞は、みな動詞の中に含まれることになる。いや、より正確に言えば、o や e, a などの代名詞に取って替わる no は — これらの代名詞が動詞の一部であるなら — 動詞の中にまで食い込んでいることになる。

5. 接語形主語人称代名詞どうしの間の相違 否定辞 no との組み合わせは、また、tu, al, その他の人称の接語形主語人称代名詞の間に、振る舞いかたの違いがあることを明らかにした。実は、類型論的研究から、このような区別は北イタリア諸方言一般に当てはまるのではないかと考えられている。フリウリ語のような義務的に使われる接語形主語人称代名詞が発達した諸語を調べると、それが2人称で発達していて他の人称には欠けているという方言はあるが、他の人称にはあるのに2人称が欠けているという例は見つかっていないのである (Renzi / Vanelli 1983)。

6. 接語形代名詞 a さて、先ほどは、否定辞 no を境としてそこらいわば内側の位置について考えたが、さらに no の外側に、もう一つ、代名詞(と呼べるならば)のための位置があると考えられる。それは、a という代名詞の位置である(この a は、もちろん6人称の主語人称代名詞 a とは異なる)。

a の分布や機能には方言差があつて、これを持たない変種もあると思われる。現在の標準化正書法では¹²⁾ この代名詞にはごく限られた位置付けしか与えられていない。また、幾つかの方言では、非人称など特定の種類の表現に結びつけられているように思われる。別の幾つかの方言では、a はさらに用途を広め、動詞のすべての人称形の語頭にまで使われるようになった。

方言によっては、a が、ちょうど代名詞 o と類似の位置、すなわち1・4・5人称の定動詞の先頭に立ち、あたかも接語形主語人称代名詞のように見えることもあり、Marchetti や Ilescu は、1・4・5人称の接語形主語人称代名詞の方言的ヴァリエーションの1つとして a を挙げている。また、文法書に

よっては, *a i ven daúr* 「彼について来る」のような形に言及し, *al* は代名詞 *i* の前に来ると *a* に変わる, と説くものがある (例えば Lamuela 1987).

しかし, この解釈には問題がある. 先ほどの例 *a i ven daúr* に *no* をつけると *a no i ven daúr* となるのである. つまり *a* は, 他の代名詞とは異なり, 否定辞の *no* の前に来るので, 接語形主語人称代名詞とは異なった位置をしめる, 別の種類の接語であると考えざるを得ない. また, *a* は代名詞 *al* とともに出てくることがあり, この場合, *a* と *al* が別のものであることが明確になる: *a nol cjante*.¹³⁾ したがって, 現在, 言語学的には *a* は主語人称代名詞ではないと考えられている¹⁴⁾.

さて, *a* を新たな種類の接語として加えると, 動詞は「*a* + 否定 + 主語 + 間接・直接目的語 + 動詞語幹 + 語尾」という, 多くの情報を包み込んだ大きな塊として再定義されることになる. すべての方言で常に音声的に実現されるわけではないとは言え, *a* の位置を考慮に入れると, *no* が動詞の内部に取り込まれているのがより明瞭になる.

7. 主語ゼロの言語と屈折語尾 動詞の前 (後) に置かれた接語が, 動詞の一部であるという考え方は, 別に目新しいものではないであろう. 発音指導などで, 接語形の代名詞を「動詞とひと続きに, 1つの単語であるかのように」読みなさい, と言うように. しかし, ここでは, このような考え方が意味し得ることを, また別の観点から見てみたい.

「イタリア語では, 動詞の活用から主語の人称がわかるので, 強調や対比などの理由がなければ, 主語をたてることはしない」とよく言われる. あるいは, フランス語で主動詞には主語が常に添えられることが, その動詞活用語尾の貧弱さと結び付けて語られることがある.

接語形人称代名詞との関連で, フリウリ語の振る舞いは, この説明とは合わないことが問題とされた. 先ほどの動詞 *cjantâ* は, フリウリ語の動詞の大多数を占める, 言わゆる第一活用動詞の典型であるが, その現在形のうち, どれひとつの人称をとっても, 他の人称のと同じ形をしているものはない. 語尾変化をみれば, 主語の人称は一意的に決めることができる. にもかかわらず, フリウリ語では接語形主語人称代名詞が — 少なくとも他の接語がない限り — 常に動詞に添えられなければならないのである.

しかし, もしフリウリ語の接語形主語人称代名詞が動詞の定形の一部をなすとすれば, このような問題は解決する. つまり, 本当の意味での人称代名詞は強形の人称代名詞であり, 主語だと思っていた部分は, 語尾とともに動詞の活用を示す接辞をなしていると考えるのである. すると, 最初はフランス語と類似していると考えられたフリウリ語の人称代名詞の振る舞いは, 実は, むしろイタリア語のそれに近いという結論になる. (主語だと思っていた部分が動詞の一部なので) 通常の状態では, フリウリ語は主語ゼロで, 強調・対比などの必要に応じて強形の代名詞が任意に用いられる, ということであるから (Kayne 1974, cit. in Beninca' 1986).

8. 最後に 否定辞 *no* を観察することによって、接語形人称代名詞の特徴・機能がより明確になった。それと同時に、否定辞自体も、ただ動詞に「添えられている」だけではなくて、接語の要素の間に位置付けられ、それらと密接に関連して機能していることが窺えた。

今回は、研究のきっかけとなった現象そのものをわずかばかり覗いてみたに過ぎない。それに関して出版された多数の論文については、ほとんど検討することができなかった。あるいは、その必要もないのかも知れない。そこで取り上げられている問題は、フリウリ語に限らず、他の言語の研究との関連でも、多く論じられてきたものであるから。

本稿で取り上げた事柄は、変形生成文法の枠組みで論じられることが多い。その場合、問題設定も、この文法に固有の考え方に基ついてなされる。空範疇 *pro* に関する理論によって北イタリア諸方言とフランス語の主語代名詞の違いが説明できるか、フリウリ語の否定が生成されるのは AgrP よりも高い位置か低い位置か、接語形人称代名詞はもともと屈折の一部なのかあるいは項の位置に生成されて後に動詞の語頭の位置に移ってくるのか、など¹⁵⁾。

にもかかわらず学派や方法論の枠を超えて研究成果の共有が行われているのは、フリウリ語学では、多くの研究者が、単なる理論的研究のみならず現地調査・フィールドワークにも携わり、未調査の方言・変種の記述や今まで顧られることのなかった事実の再発掘に貢献しているからである。

研究にも流行り廃れがあるとよく言うが、フリウリ語の場合、動詞の中に組み込まれる否定辞 *no* が興味深い問題を提起してきたのに比べると、いわば動詞の外にある否定語あるいは否定の補助語 (*nissun nol ven*. 「誰も来ない」、*mai nol vignarà*. 「決して来ないだろう」、*nol mangjie plui*. 「もう食べない」など) についての調査・研究は遅れているように見える。否定文を成立させるのに必要か否かという点から見れば、*mai* や *plui* は任意的な要素だが、これらの語が否定とどのくらい密接に結び付いているかには不明な点がある。例えば「誰も来ない」は *nissun nol ven*. / *nissun al ven*. の両方が可能だが、「決して来ないだろう」については *mai nol viodarà*. は可能だが *mai al viodarà*. が可能かは確かなデータが得られなかった (しかし、選択疑問文に対して否定で答えるのに “*mai!*” 「そのようなことは決して無い!」 とは言えそうである)。

もちろん、これらの問題について、文法書・学習書などに言及が無いのではない。規範ではなく、フリウリ語話者が実際にこれらの語をどう使っているのかを知るための資料が不足しているのである。この言語の何百という方言の状況を把握したうえで何かを言おうとすればなおさらである。フリウリ語研究にとって、言語調査・事実の把握は今なお大きな課題である。

注

本稿では、フリウリ語の形は、原則として、Lamuela 1987 を修正した表記法である現行の正書法を用いて書き表しある。なお、本稿で「フリウリ語」という場合には、特に断っていない限りは、中部方言

のことである。現行の正書法、また、文学で広く用いられてきた共通語「フリウリ語コイナー」もこの方言に基づいている。

1) *jo no* 「私はそうではない」というような形式(この場合, *no* は *nò* と書かれる)は、一見、否定辞が否定される語の後ろに置かれているようだが、この場合の *nò* は、(文脈から了解される) *no*... 「...ではない」というような文の代わりをする語 *profrase* であり、定動詞に前置される *no* とは異なると考えられよう。

2) これから見るように、強形と弱形の区別は、意味の上からは強調形と非強調形、発音の上からは強勢形と非強勢形、形態統辞論の点からは独立(あるいは自由)形と接語形の違い、ということになる。

3) 数字は人称(「×××複数」の代わりに、4人称、5人称、6人称とした)を表わし、斜線を挟んで最初が強形、二番目が弱形である。なお、4. の *noaltris* は、本来、*nò* に *altris* 「他の」をつけて強めたものだが、*nò* との違いはあまり明確ではない。それに対し、5. では、*vò* が(複数の意味ではなく) *tù* に代わる敬称「あなた」、*voaltris* (実際の発音では *vualtris* に近くなることが多い) は単なる複数形「君たち、あなたたち」という区別がある。また、6. の弱形には、*a* のほか *e* という形(ウディネ市周辺でよく使われる)もある。また、厳密に言えば、これらの代名詞に加えて非人称を表わす代名詞 *si* が存在するが、これは別に扱う必要があるので、本稿では取り上げない(この語に関する問題点の幾つかは、山本 1992, Yamamoto 1994 で取り上げたが、その多くはいまだ未解決のままである)。

4) ただし、次節で見るような条件下で弱形の代名詞からなる主語が落ちることはあるが、その場合でも、動詞は必ず何らかの後接語 *proclitico* を伴うのが義務的で、全く単独で用いられることはない。

5) ここでは、単なる活用形の羅列ではなく、それぞれの動詞形が独立の句を形成しているという設定を示すため、各句を文の形(大文字ではじめて最後にピリオドを打つ)にしておいた。なお、*Cjante* と *Cjantin* については、このような形が存在しないのではなく、現在形としては使われない(命令形 — *Cjante*. 「歌え」、*Cjantin*. 「歌おう」 — としてなら使われる)ということである。また、これ以降、紛らわしくない限りは、人称をあらわす番号は省略する。

6) 本稿では詳しく取り扱わないが、フリウリ語には、接語形主語人称代名詞を動詞の末尾に付加した形も存在する(*cjantio*, *cjantistu*, *cjantial*, etc.). これは一種の倒置形で、その主な用法は疑問形および感嘆文を作ることである(*Cjantio?* 「歌おうか?」、*Benedet seial cui che al ven tal nom dal Signôr*. 「ほむべきかな、主の名によりて来る者」)。このような倒置形でも、強形の主語が弱形のそれなしに単独で用いられることはない(*Cjantio jo?* ~ **Cjanti jo?*)。

7) 古いイタリア語、また、現代でもフィレンツェ方言では、弱形(接語形)主語人称代名詞が存在する。現在の標準的なイタリア語に限定すれば、接語形主語人称代名詞は、3人称男性の *egli*、非人称の *si*、また分格の *ne* (これはいわゆる非対格仮説で説明がつく)のような語の振る舞いの一部にその名残が見られるだけである。鈴木 1991 を参照。

8) 研究者によっては北イタリア諸方言に入れない「レト＝ロマンス」(あるいは「ラディン」) 諸語も、この点では北イタリア諸方言と同じような進化をたどっており、両者は同じグループにまとめることができる。もっとも、レト＝ロマンス諸語に共通した唯一の人称代名詞の体系というものは認められず、方言ごとに異なったタイプのシステムが見出されるが、程度の差はあれ、接語形主語人称代名詞を発達させる方向に進化が進んでいるという点は共通していると言えよう。なお、接語形主語人称代名詞の研究では、地理的には北イタリアではないが、トスカーナ(より具体的にはフィレンツェ)の方言も含めて論ずるのが普通となっている。

9) Marchetti 1952 は、フランス語の例のほか、ロンバルディア方言の例 *Lù se 'l fa?* 「あなたは何をされるのですか」とヴェネト方言の例 *Ti te ga dito* 「君は言った」を挙げている。実は、この2つは、フランス語の用例に比べて、よりフリウリ語に近い特徴を示している。

10) Marchetti は、ごくまれながら、他の接語形の人称代名詞が存在していることがあっても接語形主語人称代名詞が脱落しない場合があることを示唆している。この点に関しては、フリウリ中部に限っても徹底した調査は行われていないようなので、どの変種で、またどのような条件下で接語形主語人称代名詞が残るか詳細は不明。ただ、山本の個人的な体験では、文献を読んでも、ネイティブ・スピーカーと話をしても、*o lu cjanti* のような例にはなかなか出会わないし、(中部方言の) フリウリ語話者自身も、この形を、間違いではないにしろほとんど使われないと感じている人が多いのは確かなようである。

11) ここでは詳しくは扱えないが、人称代名詞の対格形と与格形が同時に現れる場合、語順は「与格+対格」となり、与格・対格とも単独で現れる時とは異なった形態をとる(例えば *i+lu>jal* となる: *tu jal cjantis* など)。その場合も、*tu* は落ちないが、他の接語形主語人称代名詞は落ちる(*o cjanti ~ jal cjanti, tu cjantis ~ tu jal cjantis*)。

12) 表記法ではなく形態論の問題であるのにこのような言い方は奇妙であるが、これは現行の正書法の規則なるものが単に音の表記だけではなく、形態論や語彙の一部にまで立ち入って規範をさだめたものであるからに他ならない。

13) *no* がない場合には、*a+al>al* というような変化が想定される (Beninca' 1989)。

14) *a* については、Beninca' 1986, Poletto 1993 が詳細に論じている。

15) 変形生成文法の立場からの北イタリア諸方言の(接語形主語人称代名詞を含めた)接語形代名詞についての総合的な研究としては、Poletto 1993 が詳しい。

参考文献

AA. VV., *Quaderni della grammatica friulana di riferimento*. Anno 1998 Numero 1, Forum, Udine

Emanuele Banfi / Giovanni Bonfadini / Patrizia Cordin / Maria Iliescu, *Italia settentrionale: crocevia di idiomi*

- romanzi. Atti del convegno internazionale di studi. Trento, 21-23 ottobre 1993, Niemeyer, Tübingen 1995
- Paola Beninca', *Friaulisch. Interne Sprachgeschichte. I: Grammatik. Evoluzione della grammatica*, in Holtus / Metzeltin / Schmitt (herausgegeben von), *Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL)*, 3. pp.563-585, Niemeyer, Tübingen 1989
- Paola Beninca', *La variazione sintattica. Studi di dialettologia romanza*, il Mulino, Bologna 1994
- Paola Beninca', *Punti di sintassi comparata dei dialetti italiani settentrionali*, in G. Holtus / K. Ringger (a cura di), *Raetia antiqua et moderna*, W. Th. Elwert zum 80. Geburtstag, Tübingen 1986, pp.457-479 (Beninca' 1994 に再録, pp. 105-138).
- Paola Beninca' / Cecilia Poletto (a cura di), *Quaderni di lavoro dell' ASIS. Atlante sintattico dell'Italia Settentrionale*. Numero 1. *Strutture interrogative dell'Italia settentrionale*, Consiglio Nazionale delle Ricerche. Centro di Studio per la Dialettologia Italiana 'O. Parlangeli'
- Paola Beninca' / Laura Vanelli, *Appunti di sintassi veneta*, in *Guida ai dialetti veneti*, IV, a cura di Manlio Cortellazzo, CLEUP, Padova 1982, pp. 29-66 (Beninca' 1994 に再録, pp.29-66)
- Paola Beninca' / Laura Vanelli, *Italiano, veneto, friulano: fenomeni sintattici a confronto*. in *Rivista Italiana di Dialettologia* 8 (1984) pp.165-195
- Giorgio Faggin, *Grammatica friulana*, Ribis, Campoformido (Udine) 1977
- Giorgio Faggin, *Vocabolario della lingua friulana*, Del Bianco Editore, Udine 1985
- Giuseppe Francescato, *Dialettologia friulana*, Società filologica friulana, Udine 1967
- Giovanni Frau, *I dialetti del Friuli*, Società filologica friulana, Udine 1984
- Maria Iliescu, *Le frioulan à partir des dialectes parlés en Roumanie*, Mouton, The Hague-Paris 1972
- John Haiman / Paola Beninca', *The Rhaeto-romance Languages*, Routledge, London and New York 1992
- Richard Kayne, *Connectedness and Binary Branching*, Foris, Dordrecht 1984
- Xavier Lamuela (a cura di), *La grafie furlane normalizade*, editions de aministratsion provincial di Udin, 1987
- Giuseppe Marchetti, *Lineamenti di grammatica friulana*, Società filologica friulana "G. I. Ascoli", Udine 1952
- Giulio Andrea Pirona / Ercole Carletti / Giov. Batt. Corgnali, *Il Nuovo Pirona. Vocabolario friulano*. Seconda edizione, Società Filologica Friulana, Udine 1992
- Cecilia Poletto, *La sintassi del soggetto nei dialetti italiani settentrionali*, UNIPRESS, Padova 1993
- Lorenzo Renzi / Laura Vanelli, *I pronomi soggetto in alcune varietà romanze*, Scritti in onore di Giovan Battista Pellegrini, Pacini, Pisa 1983, pp.121-125 (Vanelli 1993 に再録, pp. 23-49)
- Luigi Rizzi, *On the Status of Subject Clitics in Romance*, in O. Jaeggli / C. Silva-Corvalan (a cura di), *Studies in Romance Linguistics*, Foris, Dordrecht 1986, pp.391-419
- Piera Rizzolatti, *Elementi di linguistica friulana*, Società filologica friulana, Udine 1981

Massimo Vai, *Alcuni aspetti della negazione in milanese da Bonvesin a oggi*, in AA.VV. *op. cit.*, pp. 159-169

Laura Vanelli, *I dialetti italiani settentrionali nel panorama romanzo*. Studi di sintassi e morfologia, Bulzoni, Roma 1993

Laura Vanelli, *Il sistema dei pronomi soggetto nelle parlate ladine*, in D. Messner (Hrsg.), *Das Romanische in den Ostalpen*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien 1984, pp.147-160 (Vanelli 1993 に再録, pp.105-120)

Shinji Yamamoto, *Intorno al clitico si passivante/impersonale in friulano*, in *Il Friuli: lingue, culture, glottodidattica. Studi in onore di Nereo Perini*, vol.2, a cura di Silvana Schiava Fachin, Edizioni KAPPA VU, Udine 1994, pp.143-156

鈴木信吾「イタリア語とフィレンツェ方言の主語代名詞：3人称 egli, ella の歴史的展望」『イタリア学会誌』 Vol. Num. 41, 1991, pp.84-103, 273-274

山本真司「受動的か非人称的か — フリウリ語における不特定の si」『イタリア語ことばの諸相 — 秋山余思教授退官記念論文集』 イタリア書房, 東京 1992, pp.109-123